



1983-1

No. 172

【表紙】

妙喜庵茶室

解説は25ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

日本文化と西洋文化

林 健太郎 4

随想 行くも夢、来るも夢

吾妻 徳穂 13

今年度の芸術祭を顧みて

——演劇部門——

和田 秀夫 15

今年度の芸術祭を顧みて

——能楽部門——

山崎有一郎 17

現代フランス文化と文化政策①

フランス文化政策の新しい方向

植木 浩 19

文化庁ニュース

昭和57年度(第37回)芸術祭芸術祭大賞・

同優秀賞決まる 23

第29回文化財防火デー 25

重要無形民俗文化財の指定等 26

展覧会

京の人形 30

新しい紙の美術—アメリカ展 30

伝統芸能への招待⑨ 28

邦楽

国立劇場ニュース 31

近松名作集

フランス文化政策の 新しい方向

文部省学術国際局審議官

植木 浩



新鋭ジャック・ラング

文化大臣の登場

一九八一年五月、世界注目のうちにフランスにミッテラン政権が誕生した。どのような新政策を打出すかは、これまた多くの人々の注視するところであったが、ミッテラン大統領の下、モロワ首相の率いる新内閣は、「科学研究 (recherche)」と「文化 (culture)」を最重要政策として掲げることとなった。

そして科学研究・産業大臣には実力者のシユヴェーヌマンが、文化大臣には恐らく誰も予想しなかった弱冠四一才の新人、ジャック・ラングが起用された。



ジャック・ラング文化大臣

国立ナンシ
ー大学の国際
法の教授であ
るが、同時に
演劇の専門家
でもある、ラ

ング新文化大臣は、世界的にも有名なナンシ
ー国際大学演劇祭の主宰者として活躍してき
た人物であり、日本の演劇にも詳しい。

文化人であり、かつ若いだけあってそのセ
ンスの良さは抜群である。昨年四月にミッテ
ラン大統領とともに来日した際、ラング文化
大臣は、ミッテラン夫人と一緒に上野の国立
西洋美術館における「ミレーの『晩鐘』と一
九世紀フランス名画展」の開会式に出席した
が、スケジュールの都合で到着がかなり遅れ
るということがあった。

しかし、この時ラング文化大臣は、すかさず
スピーチの中で「開会が遅れたが、実はミレー
の『晩鐘』はちょうど今頃、晩鐘が聞こえてくる
時間に鑑賞するのが一番良いのです……」と
実にさわやかに挨拶をしたので、いささか待
ちくたびれていた人々の気持も一瞬のうちに
和らぎ、満場の拍手喝采を得るところとなった。

文化省予算の倍増

果たしてどのような文化政策を展開するの
だろうかと人々が期待と関心を持って見守る
中で、ラング新文化大臣は、予想を遙かに上
廻る鮮やかな政策を打出した。

それは、一九八二年の文化省関係予算を、前
年度に比べ一割に倍増したのである。正確に
いえば、前年度の一〇・一パーセント増である。
過去一〇年間、文化省予算の政府全体予算
に占める割合は〇・五パーセント前後であり、
特に最近、一九七九年、八〇年、八一年と次
第に下降線をたどってきた。一九八一年にお
ける文化省予算は、総額二九億七七〇〇万フ
ラン（一フラン約四〇円とすれば、約一二〇
〇億円）、政府予算全体の〇・四九パーセン
トであったが、これが一九八二年には、一割
に倍増され、五九億九四〇〇万フラン（約二
四〇〇億円）、〇・七五パーセントのシェア
となったのである。

その内容をみると、芸術創造援助（九〇〇
パーセント増）、地方文化振興（四八〇パー

セント増)、読書活動・図書(三〇八パーセント増)、映画・視聴覚(二五〇パーセント増)、国際交流(前年度予算額が極めて少額であったため三、三四九パーセント増)などが特に著しい飛躍的な伸びを示している。

さらに経費の種別でみると、運営費、施設費がともに一・六倍増、運営費補助が三・二倍増、施設費補助が二・三倍増となっている。ラング文化大臣によれば、この倍増政策にひきつづき、さらに一九八三年には、文化省予算を政府全体予算の一パーセントにまでもって行くことが予定されており、すでにこの方針は、ミッテラン大統領をはじめモロワ首相や蔵相の全面的な支持を得ているということである。

一九五九年ドゴール大統領が政権をとった時、フランスにはじめて文化省が設置され、アンドレ・マルローが初代文化大臣に任命されたが、これはフランス文化政策史上画期的な出来事であった。ラング文化大臣によれば、この時でさえ文化省予算は、政府予算全体の〇・三五パーセントであり、翌一九六〇年に〇・三八パーセントになったに過ぎず、これに比べれば、いかに今回の予算倍増が思い切ったものであるかが分かるだろうといっている。ラング文化大臣は、一昨年九月の国民議会における予算説明において、一九五九年に文化省が誕生してから二十二年間、長く負しい

少女時代を経てようやく文化省は大人になり、そして前代未聞の予算の倍増ということで、今や文化省は、フランス政府における現代の「シンデレラ」であると演説している。国会における大臣の演説の中で、シンデレラの物語が引用されるのは、いかにも文化の香り高いフランスならではの話である。

新文化政策の基本的理念

フランスの新しい文化政策の基本的な理念を示すキール・ワードは「人生への権利(*le droit à la vie*)」という語である。(註一)

そしてこれを支えるものとして「労働への権利(*le droit au travail*)」と並んで「美への権利(*le droit à la beauté*)」がある。

この「美への権利」は「幸福への権利(*le droit au bonheur*)」といいかえられている場合もある。これは、各市民が美的作品を楽しむ、享受する権利であり、もし才能があるならば、自ら美的作品を創造する権利でもある。これまで大衆は、芸術を受身による「消費(*consommation*)」の対象としていたが、もっと能動的にこれらに直接参加し、自ら実行することへの要請が高まってきているからである。モロワ首相は、昨年六月にマチス美術館を訪れて演説し、

「我々は、例えすべてがマチスやピカソのようでなくても、それぞれ、自らの人生にお

いて俳優でなければならぬ。そして人生に何等かの意味を与えなければならぬ。」と述べている。

フランスの新文化政策の基本的理念である「人生への権利」「美への権利」を、実に見事な比喩で表現しているではないか。

先程も述べたように、フランスではじめて文化省が設置されたのは一九五九年ドゴール政権の誕生とともにであり、ドゴール大統領の片腕といわれたアンドレ・マルローが初代文化大臣として、今日のフランス文化政策の基礎を築いたといっても過言ではない。フランスの文化政策は、最近まで一九五九年に文化省設置令によって文化省に与えられた任務を基本として展開されて来た。

「文化省は、できうる限り多数のフランス国民が、フランスおよび人類の重要な作品に接することができるようにし、かつ、フランスの文化財にできるだけ多くの人々が親しむ機会を確保するとともに、芸術作品及びそれを豊かにする知的作品の創造を奨励することを任務とする。」(一九五九年七月二十四日文化省設置に関する政令第五九八八九号第一条)

ミッテラン政権においては、文化政策が重点の一つであることにかんがみ、文化省の任務についても、その基本的方向にのっとり、次のように改正を行っている。

「文化省は、すべてのフランス国民が、創

意し、創造する能力を養い、自由に才能を表現し、各自の選択に従い芸術教育を受けることができるようにし、社会全体の共通の利益のために、国・地方・各種社会団体の文化財の保存に努め、さらに芸術作品および知的作品の創造を奨励するとともに、できるだけ多数の人々がそれらに接することができるよう機会を与え、かつ世界の文化の自由な交流の中でフランス文化・芸術の普及に貢献することを任務とする。」(一九八二年五月一〇日文化省設置に関する政令第八二二九四号第一条)

この両者を比較すると、ミッテラン政権の新しい文化政策が、芸術の創造活動への援助、芸術教育そして国際文化交流を改めて強調していることがわかる。

新文化政策の三つの重点

ミッテラン政権の文化政策の最重要事項を三つあげるとすれば、それは第一に芸術創造活動への援助、第二に芸術文化の地方分散化の推進、第三に芸術教育の振興ということである。

(1) 芸術創造活動への援助

近年のフランスの文化政策においては、その重点は文化財の保護に置かれてきた。文化省予算の最も大きなシェアは文化財関係で占められている。ジスカール・デスタン前大統領は特に文化財の保護に力を入れ、一九八

〇年は「文化財の年」とさえいわれたほどである。

ラング文化大臣は、「創造しない社会は、滅びて行くだろう。」と、国会における予算説明の際にも強調し、文化財よりも芸術創造活動に、フランス文化政策の新たな重点を置くこととしている。しかし、かといって文化財保護を軽視している訳でないことはいうまでもない。文化財からの文化の吸収なくして新しい芸術の創造は生まれないからである。

ただ従来、文化財保護政策のあまりの大きさと重みのために、長い間、文化政策の中で「創造活動への援助」が息苦しく圧迫されていたので、それをあるべき姿に解放しようというのがラング文化大臣の意図するところである。

このような創造活動への援助の具体的プロジェクトとして、ミッテラン大統領は、次のような大胆な諸事業を提案している。それは新オペラ座の建設、国際音楽都市の設置、国立造型美術センターの新設などである。さらに一九八九年にパリ万国博覧会の開催、それと同時にフランス革命二〇〇年祭の挙行を宣言している。

(2) 文化の地方分散化の推進

フランスでは、政治も行政も文化も、すべてパリに集中している。

文化の「地方分散化(*décentralisation*)」

は、マルロー時代からすでに文化政策の柱として重点的に掲げられてきたところであり、パリ以外の各地域における文化の拠点として「文化の家(*Maison de la culture*)」が整備されてきた。

ラング文化大臣は、「文化の地方分散化は、新たな出発をしなければならない。」として、文化省でこれを担当する「文化開発部」を新設し、地方文化関係補助金を拡充するとともに、地方における芸術奨学金制度の新設、各都市に芸術家のアトリエの建設、地方美術館における作品買上げの増額などの諸施策を企画、検討中であると伝えられる。

モロワ首相も、

「フランスでは、パリだけが都市ではない筈だ。未来のマチスやドビュッシー達が、才能の花を開かせるために、わざわざ地方から(パリに)亡命しなくても、本来の家庭環境の中で、その才能を開かせることができるようにしなければならぬ。」と唱え、ラング文化大臣の地方分散化政策を支持している。(註二)

(3) 芸術教育の振興

芸術の創造は、まず芸術家の活動に負うところが大きいことはいうまでもないが、あらゆる面で、国民の芸術創造活動への関心を呼び起すことが必要である。これは芸術創造活動の基盤を造成することである。

「第二共和制(一八七〇年—一九四〇年)が、

昔、公教育制度をフランス全土に普及、整備したように、我々は文化を学校の中に、芸術教育を人材養成の中に導入しなければならぬ。(註3)という基本的な考え方に立って、フランス文化省は、教育省とともに芸術教育の改革について準備中である。

勿論この場合の芸術教育は、過去の優れた古典を通じての教育だけではなく、現代における芸術創造を目標にすえた芸術教育を構想している模様であり、芸術教育に関する法案を検討中と聞いている。

社会の活性化を目指した文化政策

以上、フランス文化政策の最近における新しい方向について、その概要を述べたが、文化政策に対する新政権の力の入れようは大変なものがある。

ラング文化大臣は、文化政策は、文化に対するフランス全体のたいなる希望の表明であり、さらに文明への希望の表明であると主張する。そして

「文化省は、美術や純粋に芸術的な活動のためにのみあるものではなく、全体の計画のため、つまり、生活を革新する『文明の計画(projet de civilisation)』のために存在すべきものである。」と述べている。(註4)

このように幅の広い構想は、関係各省の協力なしに一省の力のみでは有効に行い得るも

のではない。芸術教育の改革が、教育省の協力をなしでは行い得ないように……。そこで文化省としては、率先して政府全体に文化を蔓延(contamner)させて行かなければならぬと意気込んでいる。

ところで、フランスを始めヨーロッパ諸国を覆っているこの経済危機のさなかに、なぜフランスは文化省関係予算を重点的にとりあげ、倍増したのだろうか。

モロワ首相によれば、その理由は以下のとおりである。

第一に、文化こそは社会の基礎であり、国家社会発展計画の中核である。文化の創造こそは社会の活力のしるしであり、かつ原動力となるからだ。

第二として首相があげているのは、経済危機のもとで、文化政策は、これを克服する成功の鍵の一つを握っているという考え方である。つまり経済危機を乗り越えるには、「経済」のみならず「技術」と「文化」という合計三つの角度からの接近が必要だということである。文化は、生きる意欲であり、失業と経済危機に直面している人々を励ますものである。

さらに文化は、時には経済発展そのものを促すいわば手段ともなり得るものだとしている。他の分野の投資が一〇年、一五年という長期間かかって効果が表われるところ、文化への投資は、もっと短期間に流通を作り出す

ことができるからだという。

一九八九年に開かれるパリ万国博覧会についても、フランス政府は、このような意味から、活動と創造の場を広く開拓、提供するものとして期待をしていることがうかがわれる。

このようなフランス政府の文化政策の大構想が、具体的な段階で今後どのように展開され、実施されて行くかは、誠に興味深いところであり、注目に値すると思う。

註1 ジャック・ラング文化大臣の国民議会における予算説明などで、この「Le droit à la vie」という語が使われている。「Le droit à l'avenir(未来への権利)」と使われている場合もある。英訳では「the right of existence」になっている。

註2 一九八二年六月マチヌ美術館における演説。

註3 右 同。

註4 France, une ambition nouvelle pour la culture(フランス文化省編)一ページ。

写真—ジャックラング文化大臣
提供—フランス大使館



国立劇場 ニュース

■文楽公演 (小劇場)

近松名作集

一部 堀川波の鼓

11時半開演

二部 茂兵衛 大経師昔暦

2時半開演

三部 鍵の権三重帷子

6時開演

二月十二日・二十七日

二十日より一部と三部を入れ替え

過去二回にわたり好評を得た、二月文楽公演の「近松名作集」第三弾は、昭和三十年の復活上演以来、何度か上演を重ねた「鍵の権三重帷子」に、今回新たに復活される「堀川波の鼓」「大経師昔暦」を加えて、「近松通物」と呼ばれる異色の三名作を、一挙に上演する。

森通。封建制下で、それは死に値する行為であった。三作品通じて近松は、森通を当事者の意思に反した不幸な偶然として設定し、そうした運命を背負いつつ、なお、誠意と主体性を持つて行動する、主人公とその周囲の人々の描写に主眼を置いた。その姿は、劇的な感動を呼ぶと共に、封建制度の非人間性を鮮やかにえぐり出している。これまで、おもに文字でしか鑑賞出来なかった、円熟期の近松の迫真の人間描写が、舞台によりみかえるこの公演、

近松ファン、文楽ファン必見のものと
言える。

「堀川波の鼓」 実際にあつた出来事をもとに人妻の不義密通を描いた最初の作品で、一七〇七年(宝永四年)の初

と関係を結び身こもつてしまふ。

「茂兵衛 大経師昔暦」 一七二五年(正徳五年)の初演。改作「増補恋八卦」が昭和二十六年十月上演されているが原本の朱が見つかり、今回復活上演される。おさんは、夫以春をこらしめるため下女の玉と寝所を交換するが、そこへ来たのは手代の茂兵衛であつた。二人は互いを知らずに不義の契りを結んでしまふ。

■鍵の権三重帷子

「鍵の権三重帷子」 一七二七年(享保二年)初演。永く絶えていたのが昭和三十年に復活上演された。今回新たにカットされていた、忠太兵衛屋敷の段が加えられる。嫉妬からおさんは権三の帯と自分の帯を庭に投出したところを不義の証拠と持ち去られ、二人は夫の面目をたて討たれる決心をして落ちる。

■演 芸 (演芸場)

寄席芸の夕 二月一日
定席・中席 二月十一日

二十日

寄席芸の夕 二月十八日

花形新人演芸会 二月二十一日

国立名人会 二月二十六日

漫才春の名人会 二月二十七日

編集後記

○明けましておめでとうございます。今年はおだやかな天候に恵まれ、新年を迎えたところが多かったようです。○一月号をお届けします。今月号は、国際交流基金の林健太郎先生の「日本文化と西洋文化」で冒頭を飾ることができました。この論稿は好評を博した昨年の文化振興会議での講演をもとにしたものです。御多用のところ、先生には手を入れていただき有難うございました。○昨年は、フランスのミッテラン大統領が来日しました。ミッテラン政権のもとでのフランスの文化政策などについてフランスの事情に詳しい学術国際局の植木浩審議官に寄稿していただきました。これからも連続して執筆していただく予定です。○昭和五十八年度予算の政府原案がまとまりました。文化庁の予算案の概要については次号で説明する予定です。○本誌の編集などについて、読者の方からお便りをいただきます。それらも参考にさせていただき、今後とも誌面の充実を図っていきたくと考えています。(W)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)3681-2411(代表)

「文化庁月報」一月号

昭和58年1月25日印刷・発行

編集 文化庁

発行所 株式会社 きょうせい

〒100 東京都千代田区千代田3丁目2番2号

本社 〒100 東京都千代田区千代田7丁目4番12号

営業所 〒100 東京都千代田区千代田5丁目5番地

電話 (03) 2681-2411(代表)

振替口座 東京 91-161番

印刷所 (株)行政学会印刷所

年間購読料 二、一六〇円(送料共)



1983-2

No.173

【表紙】
永保寺開山堂

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

国立歴史民俗博物館開館に当たって
井上 光貞 4

随想 登山のすすめ
—— 高松山 —— 田中 澄江 9

現代フランス文化と文化政策②
フランス文化政策の中枢
—— 文化省 —— 植木 浩12

＝ 報 告 ＝
昭和57年度公立文化会館
運営研究協議会を終えて 文化部文化普及課17
米国における『日本佛教彫刻展』
鷲塚 泰光20

文化庁ニュース	
昭和58年度文化庁予算案の概要	23
著作権審議会第36回総会開催	25
文芸作品の放送使用料引き上げ決まる	25
昭和57年度芸術文化行政基礎講座開催	26
昭和57年度公立文化施設技術職員研修会開催	26
昭和57年度芸術祭授賞式行わる	27
昭和57年度包括宗教法人等管理者研究協議会 (東京会場)開催	27
日本語教育研究協議会、中国帰国者に対する 日本語指導者研修会の開催	27

展覧会
特別展覧会
弘法大師と密教美術 28

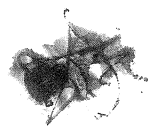
国語シリーズ②「慣用句」に関する問題 29

国立劇場ニュース 歌舞伎公演 島衛月白浪 31

フランス文化政策の中枢 文化省

文部省学術国際局審議官

植木 浩



第三共和制時代の「芸術政策」

ドゴール大統領の第五共和制の発足とともに、一九五九年フランスにはじめて文化省が設置され、アンドレ・マルローが初代大臣に任命されたが、現代フランスの文化行政の機構も、基本的にはこのマルローの文化省の系譜を承継しているといえることができる。

勿論、第五共和制より以前のフランスに、文化関係の行政組織がなかった訳ではない。

第三共和制（一八七〇年―一九四〇年）の時代には独立した文化省はなく、教育省の所管のもとに芸術庁（*Secrétariat aux beaux-arts*）が置かれ、文化行政を担当していた。ただし例外として第三共和制の初期に、ほんの一時、芸術省が設置されたことがあるが、極めて短期間で廃止されてしまっている。

第三共和制においては、近代国家としての教育制度の確立に全力が注がれ、特に一八八〇年代には、無償、宗教的中立、義務制の三つを基本原則とした公教育制度が整備されたのであった。

第三共和制時代の文化政策は、「*beaux-arts*」という言葉が、元来は「美術」を指していることからわかるように、美術行政がその中心であり、しかも一部の上流階級を対象とした、大変幅の狭い「芸術政策」でしかなかったといえる。

当時の状況について、オーギュスタン・ジラルなど現代フランスの文化政策研究者達は、「政府は芸術庁の活動を通じて、王侯貴族が行ってきたような文芸擁護の役目を続けることに熱心であった。例えば、国家の公式祭典の開催や若干の芸術家への奨励援助を行うとともに、演劇の公演や展覧会の開催によって限られた少数のバリの「エリート」に程度の高い娯楽を提供していたに過ぎない。このような活動は、極く一部の限られた社会階級を対象とし、そしてそれは社交の性格、パリの上流社会のための社交的儀式的性格を有していた」と述べている。（註1）

宮廷時代の文化政策は、ルイ王朝、ナポレオン帝政時代のいずれを見ても、「装飾的」「誇示的」で「社交的」な色彩が強いが、第三共和制の基本的ニーズが充たされるようになると、人々の関心は必然的に生活の質や文化へと向けられてくる。

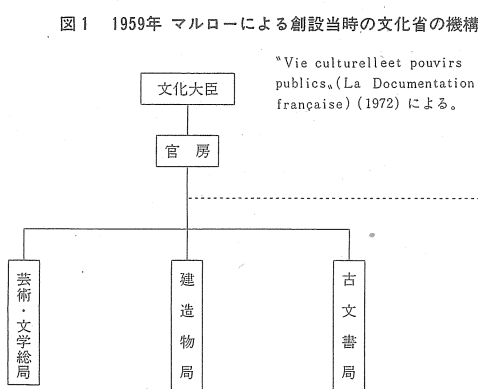
請を背景に、従来の限られた、狭義の「芸術政策」から、新しい大衆社会時代、高度産業社会に対応した、より幅の広い「文化政策」に向かっている胎動が現れ始めてくる。

このような文化および文化政策への社会的要請の増大の原因については、いろいろと挙げられている。

第一は、文化的要因として、一般大衆への教育の普及とその水準の向上に伴う文化的需要の増大である。

第二は、経済的要因である。産業社会の発達に伴い一般大衆の生活水準も高まり、生活

国立映画センター



第四は、余暇時間の増大という社会的要因を挙げなければならない。フランスでもヴァカンスは、かつては一部の富裕な有閑階級の特権に過ぎなかったが、一九三〇年代から次第に一般にも有給休暇制度が実施されるようになり、さらに夏季のいわゆるグラランド・ヴァカンスは特に第二次大戦後、一般大衆にも普及するようになった。

このような余暇の増大は、当然、大衆の文化的欲求をかきたてることとなったのである。

第五に、やはり社会的な要因として、産業社会の高度化に伴う都市化や管理化の進展である。都市化や管理化が進むと、人々は一方ではこれまで以上に人間性の回復を求めるようになり、都市の文化的環境への問題意識が増大する。

このような文化への社会的な要請は、旧来の一部エリート階級を対象にした「芸術政策」から社会全体を対象とした「文化政策」へと、国家の新たな積極的な役割を必要とするに

和制の文化政策もその延長線上にあったといえることができる。一言にしていえば、芸術を社会の「装飾品」と考えた「装飾的芸術政策」であったといえる。

つづく第四共和制（一九四六年―一九五八年）においても、基本的には同じような流れの中での芸術政策の時代であった。一時「青少年・芸術・文学省（*Ministère de la jeunesse, des arts et des lettres*）」が設けられたことがあるが、これもごく短期間で廃止され、あとは教育省の芸術局または外局の芸術庁として存在していたのである。

文化省の創設

——「芸術政策」から「文化政策」へ——

しかし時代の進展は、次第に文化を社会全体にとって欠くことのできない「必需品」とし、そのような社会的要請に対応すべき政府の役割を増大させるに至る。

特に、フランスの文化政策をみると、一九五〇年頃を境目にして、このような時代の要

たる。

一九五九年、第五共和制の発足とともに、フランスに初めて文化省が創設されたのは、まさにこのような時代の進展に伴う社会的要請に対応しようとするものであったといえる。

こうして、当時教育省の所管下にあった芸術庁の芸術文学局、建造物局、古文書局と、産業省に属していた国立映画センターをまとめ、独立した「文化省（*Ministère des affaires culturelles*）」として設置をみるにいたった。

フランス文化政策史上、ここによりやく独立した、本格的な文化行政機関が、アンドレ・マルローを大臣に迎えて発足したのである。

文化省の機構と機能

フランス文化省創設当初の機構は、図1のとおりであるが、その後、名称も「文化・環境省」となったり、あるいは「文化・コミュニケーション省」になったりしながら、今日までその機構の拡充が図られ、現在の「文化省（*Ministère de la culture*）」にいたっている。

例えば、芸術・文学総局はその後、発展的に解体されて各分野ごとにそれぞれ独立した局として再編成され、また音楽部局や図書部局が、順次拡充整備されて独立の局となっている。さらに文化振興調整基金が新設されたり、国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センターが設置されるなど、創設以来過去二十

年間の文化省の機構の変遷と発展には目をみはるものがある。

またこの間、文化大臣も交代し、現在のジャック・ラング大臣は、マルローから数えてちょうど十人目に当たる。

文化省の現在の機構は、図2のとおりであるが、その組織の中核は、文化の各分野を担当する七つの局からなっている。これらは大別すれば、文化財関係と芸術振興普及関係の二つにくることが出来る。

文化財関係——古文書局、博物館局、図書局、文化財局

芸術振興普及関係——演劇芸能局、音楽局、美術局

なお映画行政については、文化省附属機関である国立映画センターが、同時に内局的な機能も果たしている。

これらは、いわば「タテワリ」の分野別内部局であるが、このほかに行政管理、企画調整、調査など重要な行政機能を果たす「ヨコワリ」の機能局が二つある。

総務局——人事、予算、管財、法規、計算機処理

文化振興局——企画、調整、調査、文化振興、国際関係

これらは日本流に言えば大臣官房の機能を果たしているが、フランスではこれらと別に大臣官房があり、日本の行政組織とは異なっていて、大臣と進退をともにしている一群の職

員を中心に構成されており、大臣と各局間の政策の調整等を行っている。

また文化省には、多数の附属機関があるが、中央における文化行政機能という観点からは、次に挙げる三機関が特に重要な役割を果たしている。

国立映画センター (Centre national de la cinématographie)

一九五九年文化省設置とともに、当時の産業省から移管されたもので、映画行政を担当し、映画の振興、映画規制、映画産業への財政援助、映画文化財の保存普及等を行っている。

文化振興調整基金 (Fonds d'intervention culturelle)

各省、地方公共団体、民間団体などにまたがる実験的、独創的な文化事業のプロジェクトに対応し、単年度予算方式の技術上の制約や各省間のしきりを超えて、機動的、弾力的に財政援助をするための基金で一九七〇年に設置された。文化省にその事務局が置かれ、予算も文化省に計上されており、後ほど述べるように、各省にまたがる省際的、調整的機能を有している。

国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センター (Centre national d'art et de culture Georges-Pompidou)

一九七七年に開館した総合的な機能を有する現代芸術文化の殿堂で、美術館、図書館、

人材養成——音楽局、美術局、演劇芸能局、文化振興局、国立映画センター等

行政管理運営——総務局、文化財局等

各省文化関連行政と文化省

フランス文化政策の中核が文化省であることは、あらためていうまでもない。しかし「文化」の意味を広義にとらえた場合、文化省以外の多くの省も、文化関連の行政を行っているということができる。その主要ないくつかを例示してみよう。

教育省——学校教育の各段階において、芸術教育や文化活動の実施を所管しているほか、文化関係の人材養成も行っている。

なお、学校建設費の1%を建物の芸術的裝飾に充てることとした、有名な「1%運動」は、一九五一年に教育省から始まったものであるが、現在ではこの方式は全省庁に適用され、文化省と各省の協力のもとに実施されている。

自由時間省——「自由時間省 (Ministère du temps libre)」というのは変わった名前であるが、いかえれば余暇・青少年・スポーツ省ともいうところだろう。青少年団体の文化活動への援助、全国に一二〇〇ある「青少年文化の家」に対する援助などを実施している。文化省の所管している「文化の家」に比べると、この「青少年文化の家」の規模はずっと小さいが、各種の文化活動を行っている。

デザイン・センター、音響研究所、フィルム・ライブラリーなどにより構成されている。

このほか文化省の附属機関等としては、国立古文書館、国立図書館、ルーヴル美術館、コメディー・フランセーズ劇場、パリ・オペラ劇場、国立バリ高等音楽院、国立高等美術学校、国立セーブル陶器製造所をはじめ、多数の文化関係機関を持っている。

さらに文化省はフランスの各地域ごとに地方文化局を設置しており、本省、附属機関、地方文化局等を含め、全体としては大変大きな組織を構成している。

一九八〇年一月現在で文化省管下全体の職員数は七九〇〇名にのぼり、うち一割余りが本省内部局等に、残りの九割近くが、附属機関、地方文化局等に属する。(註2)

これら文化省の組織のうち、ランク新文化大臣のもとであらたに拡充整備、所管換えになったものは次のとおりである。

第1は文化振興局 (Direction du développement culturel) の設置である。この部の前身として「文化振興部 (Mission du développement culturel)」が存在していたが、ランク文化大臣の重点政策の一つである文化の地方分散、地方文化振興をいっそう推進するため、また文化政策の総合調整機能を強化するため、局に昇格させたものである。

第2は国立図書館 (Bibliothèque nationale) を教育省の所管から文化省に移管したこと

農業省——農業教育の一環として、農民に對する文化関連事業を行っている。

対外関係省——文化省の密接な協力のもとに国際文化交流事業を実施している。具体的な事業については、両省の指導・援助を受けている「フランス対外芸術協会 (Association française d'action artistique)」に実施させている。

このような各省の文化関連行政についての調整は、必要に応じて設けられている「文化振興調整基金各省委員会」や「文化財各省委員会」など各省間委員会において行われているほか、文化省に置かれている「文化振興局」が調整機能を担当している。

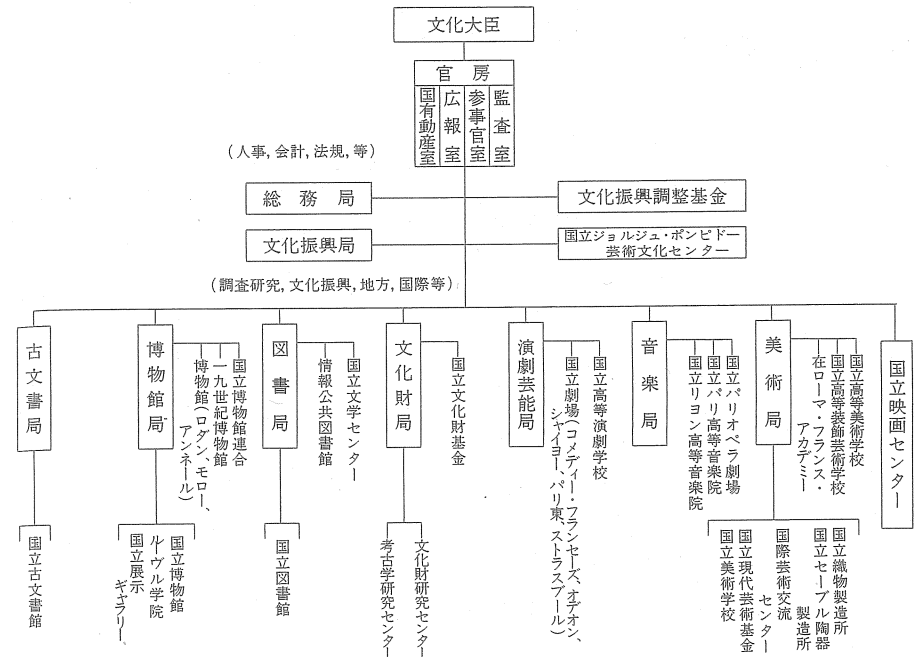
文化振興局の代表は、各省の文化関連行政や社会・経済計画、国土・地域計画の策定等に参画しているほか、対外芸術協会の国際交流事業についても、対外関係省とともに企画から実施まで参加している。

先程も述べたように、一九七〇年に「文化振興調整基金」が設置され、各省等にまたがる文化関係プロジェクトに補助金が支出できるようになった。

基金の予算は文化省、その管理も文化省が行っており、各省委員会の基本方針のもとに運営されているが、設立以来十年たった今日、この基金が設置されたおかげで、文化関連行政における各省間および中央と地方の風通しと協力態勢は大変改善されたといわれている。

図2 フランス文化省中央機構図(1982年)

文化省資料に基づき作成



以上のように、文化政策を担当する文化省を中心に、文化関連行政は広く各省にまたがって行われているが、ジャック・ラング文化大臣は、各省協力してフランス文化のルネッサンスに向って進まなければならない現在、どの省といえどもこの新しい文化の闘いから逃れることはできないといっている。そして、「フランス政府の文化大臣は一人ではない。四十四人の文化大臣がいると考えるべきである。」と、ラング大臣一通りの表現を使って強調している。（註3）

そしてこのような広大な領域にわたる文化行政、文化関連行政全体の中で、文化省はどのような役

割を果たすべきであろうか。

これに対する答えとして、文化省はこれらの推進力 (impulsion)・想像力 (imagination) の中心となるべきであり、文化省は関係各省によるオーケストラのいわばまとめ役になるべきであるというのが、ジャック・ラング文化大臣の哲学であり、「文化省論」でもある。

Aspects de la politique culturelle française (Unesco)

2 La politique culturelle en France (Unesco) 111頁〜115

註3 ジャック・ラング文化大臣の国民議会における一九八二年度予算説明
なおフランスには、いろいろな種類の大
臣級のポストが四十四ある。

本稿の執筆にあたっては、右の註に記したもののほか、左記の諸資料等を参考にした。

World Conference on Cultural Policies: Situation and trends in cultural policy in Member States of Europe (Unesco) (1982)

Vie culturelle et pouvoirs publics (La Documentation française) (1972)

国立劇場 ニュース

■歌舞伎公演 (大劇場)

島衛月 白浪

三月五日・二十七日

●かいせつ

「散切物」の代表作として有名なこの作品は、明治十四年(一八八一)十一月、東京新富座で初演されました。

「散切物」(散切狂言)とは、明治初年の文明開化期の新風俗を題材とした芝居で、ちょんまげを切り落した散切頭や洋装の人物が登場するところから、その呼称があります。風俗は変わっても、作劇や演出は従来の歌舞伎と殆んど同じで、この作品でも、合方や義太夫はもちろん清元までも使われているうえ、セリフも七五調を基本に割りぜりふもふんだんに用いられるなど、多彩なお芝居らしさをたっぷりとご覧になっていただけるはずです。

当時のハイカラな風俗や、新語、外来語などが諸々にちりばめられたこの作品は、河竹黙阿弥が自らの引退記念として、作者生活のすべてを賭けて書き下ろした力作です。しかも歌舞伎らしい醍醐味も各幕に用意されているというわけで、異色の傑作であると同時に黙阿弥を知るにもきわめて適切な演目でもあるのです。

しかし、この芝居で最も楽しんでいただけののは、黙阿弥特有のさりげない会話や繊細な描写から浮んでくる、明治期の東京の懐かしい人情や雰囲気だ

と思われまふ。なにげない言葉のやりとりや、淡彩な情景描写から滲み出すいかにも新時代らしい匂いを濃密にたたえた空気を、心ゆくまで味わっていただけるにちがいありません。

菊五郎が島蔵に海老蔵が千太に、それぞれ初役で挑み、弁天お照を梅幸、望月輝を羽左衛門が演ずるほか、菊五郎劇団を中心とした顔触れで周囲を固める配役は、必ずやそうした期待を充たしてくれるものと思われまふ。

●あらすじ

明石の島蔵と松島千太は、共謀して



島衛月 白浪
右 松島千太 (市川海老蔵)
左 明石の島蔵 (尾上菊五郎)

自首することを家族に誓って、ひとまず舟で神戸へ乗り出します。舟は播磨灘で疾風に会い散々な思いをしつつも、島蔵は何とか生きのびます。(二幕目)

東京へ出た千太は、お照が裕福な代

言人望月輝の妾となったのを知り、輝

をゆすりにかかりますが、元は大盗賊

だった輝に逆にやりこめられてしま

います。(三幕目)

千太は、やはり東京に出て酒屋を開

いている島蔵を尋ね、ゆすりの話を持

ちこみます。(四幕目)

島蔵は千太と招魂社の前で待ち合わせ、涙ながらに改心をすめると、さすがの千太も潔く一緒に自首することを誓います。(大詰)

■日本舞踊の流れ

(小劇場)

歩く・走る

― 舞踊への展開 ―

三月四日・五日

■雅楽公演 (小劇場)

伶楽 金口

― 金属の音 ―

三月十八日

■民俗芸能 (小劇場)

日本の民俗劇と人形芝居の系譜

車人形と説経節

三月三十日・三十一日

■演芸 (演芸場)

定席・上席 三月一日・十日

〃・中席 三月十一日・二十日

花形新人演芸会 三月二十一日

国立名人会 三月二十六日

講談春の選定会 三月二十七日

編集後記

〇かねて、千葉県佐倉市に建設中の歴史民俗博物館が三月十八日に開館となります。これを機に、その設置の意義、概要などについて井上館長に執筆頂きました。〇「なぜ山にゆくのか」とよく聞かれるけれど、好きだからとしか答えようがない山が好きである。随想には田中澄江先生に「登山のすすめ」を執筆して頂きました。〇本誌では、できるだけ早く、国立の美術館、博物館、国立劇場の催し物の紹介をしていますが、遅れてお叱りを受けることもあります。本号では28頁に展覧会を紹介していますが、三月十五日から五月八日まで東京国立博物館で開催される「ポスト・美術館所蔵日本絵画名品展」については次号で紹介いたします。

〇「伝統芸能への招待」は、休ませていただきます。お詫びしますとともに、次号以下に御期待ください。(W)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課
TEL(03)二六八二二四(代表)

「文化庁月報」2月号

(通巻第七三三号)

昭和58年2月25日印刷 発行

編集 文化庁

千原東京部 千代田区役所3丁目2番2号

発行所 株式会社 ぎょうせい

営業所 東京都港区西品町52番地

電話(03)二六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一一

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)

年間購読料 二、一六〇円(送料共)



1983-4

No.175

【表紙】

バレエ「白鳥の湖」

解説は29ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

パロディと著作権者の権利

佐野文一郎 4

随想

難破せずに乗り切れるか日本映画界

——映画とビデオ・カセット—— 品田 雄吉 8

——報告——

山田寺跡の発掘

細見 啓三 10

現代フランス文化と文化政策③

フランス文化政策とその財政的側面

植木 浩 13

文化庁ニュース

日本芸術院賞受賞者決まる……………	18
文化庁買上優秀美術作品……………	18
昭和57年度(第5回)舞台芸術創作奨励賞決まる…	19
昭和58年度芸術家国内研修員決まる……………	19
移動芸術祭春季公演計画……………	20
史跡の指定等……………	21

我が県の文化行政

文化性豊かな地域づくりをめざして

——岐阜県の文化行政—— 林 正 23

展覧会

浄土曼荼羅……………30

河井寛次郎展……………30

国語シリーズ②③ 「言葉」に関するその他の問題 28

伝統芸能への招待⑪ 26

邦舞 ——歌舞伎舞踊と上方舞——

国立劇場ニュース 31

近江源氏先陣館 ほか

フランス文化政策と その財政的側面

文部省学術国際局審議官

植木 浩



アンドレ・マルローと文化予算

文化政策を推進するにあたり、そのために必要な予算を確保することは、それ自体また大変な仕事である。このことは、文化政策の先進国ともいべきフランスにおいても同様である。

とくに、経済や産業への効果を明確に説明しやすい経済政策に比較して、その性質上、具体的な効果を説明しにくい文化政策においては、予算の確保はさらに大変である。

ドゴール大統領の片腕といわれた初代文化大臣アンドレ・マルローでさえ、文化予算の増額には、いろいろと苦勞していたようである。

一九五九年創設当初の文化省の予算は、それ以前に教育省や産業省に分散していた文化関係予算を移管し、まとめて構成したものに過ぎなかった。したがって新しい文化政策の

理想に燃えていたマルローにとつては、とうてい満足できるものではなかった。

そこでマルローは、早々、文化省予算の増額を各方面に説いて廻ったが、口ぐせのように、

「三文を一倍にしても、六文にしかならない……」

と、思い切った文化省予算の増額の必要性を主張した。

その結果、文化省予算が政府予算全体に占める割合は、一九五九年度に〇・三五パーセントであったものが、翌一九六〇年度には〇・三八パーセントに増加するにいたったのである。

アンドレ・マルローの文化政策の中で、最も輝かしい業績は、なんといっても地方における文化の振興・普及の拠点として、「文化の家 (maison de la culture)」を構想し、その設置を計画的に推進して行ったことであろう。

マルローは、国民議会において、すみやかに全フランスの各県に、一つずつ「文化の家」を設置する必要を訴えながら、次のように演説した。

「皆さん、私が『文化の家』のために要求している予算額は、高速道路二五キロメートル分と同じであります。わがフランスは、かつてある時代には、世界第一級の文化国家でありました。……この僅かな額で、やがて一〇年後には、フランスは、再び世界最高の文化国家の地位をとりもどすことができるのです。」

文化省予算の変遷

ここで最近のフランス文化省の資料に基づき、文化省創設以来、現在までの予算の移り変わりを見てみることにしたい。

先ず図1は、過去二〇年間における文化省予算の推移の状況を示している。同省資料によれば、一九七八年の時点で、文化省予算は、

創設以来、総計で二五〇パーセント増となっており、これに比較して、同じ期間におけるフランス政府全体の予算の伸びは、二一〇パーセントであるので、文化省予算の増加率の方が四〇パーセントも高いという。

なお一九七〇年代に文化省予算が急激に伸びているのは、一つには、一九七三―七五年にかけての国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術

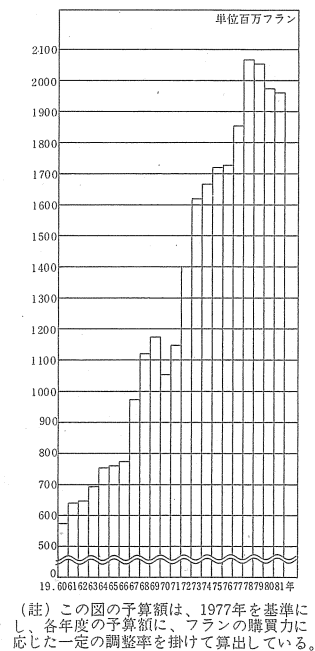
文化センターの建設費、それに七七年からの同センター開館に伴う運営費の増が要因となっている。

また一九七六年から、それまで大学庁、外務省、産業省が所管していた公共図書館や図書、出版への援助が文化省に移管され、これがまた、文化省予算を押し上げる要因の一つとなっている。

表1 1959～1983年フランス政府予算全体に占める文化省予算のシェアの推移
(文化省資料に基づき作成)

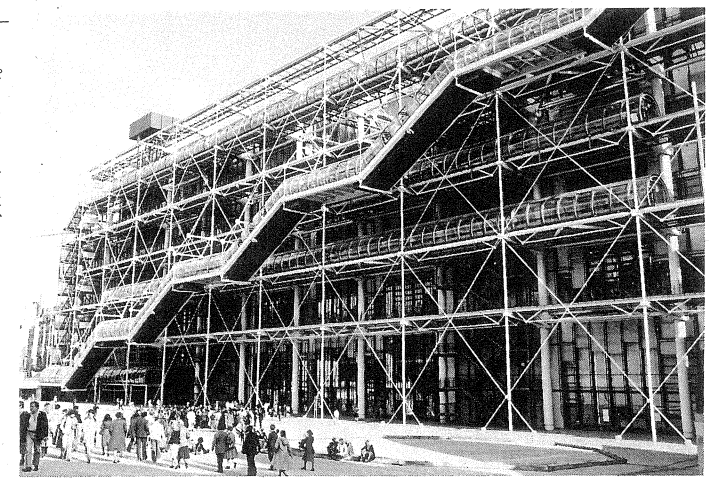
年	%	文化大臣
1959	0.35	アンドレ・マルロー
1960	0.38	〃
1961	0.41	〃
1962	0.38	〃
1963	0.38	〃
1964	0.39	〃
1965	0.37	〃
1966	0.36	〃
1967	0.40	〃
1968	0.43	〃
1969	0.42	エドモンド・ミシュレー
1970	0.38	〃
1971	0.41	ジャック・デュアメル
1972	0.48	〃
1973	0.55	モーリス・ドゥルロー
1974	0.61	フランソワーズ・ジルー
1975	0.56	ミシェル・ドルナノ
1976	0.55	ジャン・フィリップ・ルカ
1977	0.56	〃
1978	0.56	〃
1979	0.52	〃
1980	0.51	〃
1981	0.49	ジャック・ラング
1982	0.75	〃
1983	0.79	〃

図1 1960～81年フランス文化省予算の推移
(フランス文化省資料developpement culturelに基づき作成)



次にフランスの国家予算全体の中で、文化省の予算がどのようになっているか、その変遷を見てみよう。

アンドレ・マルロー文化大臣の時代は、一九五九年から一九六九年まで、およそ一〇年間続くが、その間の文化省予算のシェアは、表1が示すように、おおむね〇・四



国立ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センター
(写真: フランス大使館提供)

表2 1981～82年フランス文化省予算の事項別概要
(フランス文化省資料France, une ambition nouvelle pour la cultureに基づき作成)

事 項	1981年	1982年	対前年比 増加率%	備 考
フランス古文書館	73,181	129,145	76	
図 書	197,525	953,594	383	読書活動・図書、著作権、国立図書館等 (1982年より、国立図書館が教育省から文化省に移管され予算が増大)
文 化 財	657,005	978,444	49	発掘調査、文化財全国調査、文化財保存等
博 物 館	387,599	661,451	71	国立博物館、博物館奨励
美 術	160,415	379,806	137	美術教育、美術創造、修復技術者養成等
演 劇	284,135	550,182	94	演劇創造・普及、演劇教育等
音 楽	560,777	874,141	56	音楽普及・奨励・創造・研究音楽教育等
映画・視聴覚	31,273	109,532	250	
国 際 交 流	212	7,312	3,349	
地方文化振興・動	115,605	669,950	480	
調 査 ・ 研 究	4,742	10,771	127	
文化振興調整基金	17,883	32,732	83	
国立ポンピドゥー芸術文化センター	182,801	272,379	49	
そ の 他	304,711	508,360	67	行政運営経費、年金、賞金等
総 計	2,977,325	5,994,140	101	

テラン大統領領——ラング文化大臣のラインで文化政策が最重要事項の柱の一つにとりあげられ、文化省予算は、二九億七〇〇万フラン(現在、一五五億)であったが、一九八二年には、これが五九億九四〇〇万フランとなっている。その倍増の内訳は、表2のとおりである。

文化省の予算を、音楽、演劇、美術、映画、図書、文化財、博物館など、「分野別」のタテワリの分類に従ってその内容を分析してみると、図2のようになる。

音楽関係予算が、全体の一八・八パーセントと一番大きな割合を占めており、文化財と博物館がこれについでいる。一般行政管理経費を除けば、さらに演劇関係そして文化振興(文化の家、ジョルジュ・ポンピドゥー・センター、文化振興調整基金等が含まれている)の順となっている。

六パーセントとなっているが、これは、先ほども述べたように、ジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センターの建設に伴う予算の増加が主な原因である。

一九七九年からは、文化省予算が政府全体の予算に占める割合は、次第に下降傾向をたどり、一九八一年には〇・五パーセント台を割って、〇・四九パーセントにまで下ってしまう。

しかし、ミッテラン政権になってから、すでに本報一月号でも紹介したように、ミッ

五五(一)であったが、一九八二年には、これが五九億九四〇〇万フランとなっている。その倍増の内訳は、表2のとおりである。

これに伴い、一九八二年の政府全体の予算の中で文化省予算の占めるシェアは、前年の〇・四九パーセント

図2 フランス文化省予算の分野別内訳—1981年
(フランス文化省資料developpement culturelに基づき作成)

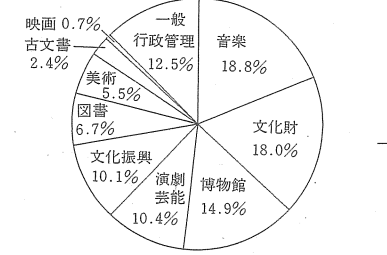
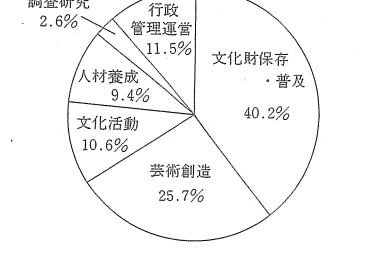


図3 フランス文化省予算の機能別内訳—1981年
(フランス文化省資料developpement culturelに基づき作成)



文化省予算の分野・機能・用途別の内容

から、〇・七五パーセントへと、劇的な急増をする結果となった。

パーセント前後である。

この傾向は一九七一年まで続くが、一九七二年からシェアは上昇し、一九七三年から一九七八年までは、〇・五パーセント台が続く。一九七四年は、とくに突出して〇・

図4 1981年フランス文化省予算分野・機能関連構造図
(フランス文化省資料développement culturelより)

		単位百万フラン					
機能別	分野別	文化財保存・普及	芸術創造	文化活動	人材養成	調査研究	行政管理運営
	1981年文化省予算総額 29億7500万フラン	1195.8	765.7	315.9	279.2	76.3	341.9
	音楽	560.6	368.9				
	文化財	535.0	484.3	21.6	168.2	1.0	0.9
	博物館	443.3	441.6		2.4	16.9	31.4
	文化振興	299.3		294.3		1.1	0.6
	演劇芸術	310.7			5.0		
	図書	200.1			7.3		
	美術	162.3	182.9	13.7		0.6	2.9
	古文書	72.7		71.9		89.4	0.2
	映画	21.0	71.0		1.7		
	一般行政	369.8	3.9	7.8	4.1	1.0	4.2
	行政管理		12.1		0.1	55.5	301.1

れば局別である——と「機能別」の相關関係がわかるように一覽できる図が作成されている(図4)。この図をみると、フランス文化省の予算の構造が立体的に浮き彫りにされており、なかなか面白い。

ことは、既に本報二月号において述べたところである。

そして、このような広い意味での、文化に關連した政策全体をまとめてとらえるため、フランスでは、文化政策の中核である文化省の予算と、その他の各省の文化関連行政の予算とを合計したものを、「文化関連総予算」(enveloppe-culture)と呼んでいる。

この「文化関連総予算」がフランスの国家予算全体の中に占める割合は、一九八一年現在で一・四パーセントであった。そのうち文化省予算は四三・六パーセントで、当然、最も大きいシェアを占めているが、その他の五六・四パーセントは、教育省、青少年スポーツ省、外務省など各省庁関係である。

一九八二年のフランスの「文化関連総予算」の概要は、図6のとおりであるが、ミッテラン政権になって、文化政策を最重点の一つにとりあげ、文化省予算を倍増したため、一九八一年に比べて、「文化関連総予算」の中に占める文化省予算の割合が大幅に増加し、六五・七パーセントとなっている。

なお、新政権になって、従来教育省の所管下にあった国立図書館(Bibliothèque nationale)を文化省図書館の管下に移管したことも、文化省予算のシェア増大の一つの原因となっている。

また、いわゆるヨコワリの「機能別」の分類にしたがい、文化財保存・普及、芸術創造、文化活動、人材養成などの区分により、文化省予算を分析すると、図3のとおりである。

文化財保存・普及関係予算が全体の約四〇パーセントを占め首位であり、次いで芸術創造関係予算(音楽、演劇、美術など)が一五・七パーセントとなっている。

フランス文化省の資料によれば、文化省の予算について、この「分野別」——いいかえ

九八二年の文化省予算を、その使途別に「運営費」「施設費」「運営費補助金」「施設費補助金」に分類し、その構造をみると、次頁の図5のようになる。

文化省予算と文化関連総予算

「文化」の意味を広義にとらえた場合、文化省以外の教育省、自由時間省(以前の青少年スポーツ省)、農業省、対外関係省(以前の外務省)など多くの省庁も、それぞれの所管行政の角度から、文化関連の行政を行っている。

建設すでに設計構想の公募が行われている。世界文化の家の創設プラン、パリの北部地区への国際音楽都市の設置計画などである。

これらは、いずれも一九八九年のフランス革命二〇〇年祭およびパリ万国博覧会の開催に向けてのバリ改造の大構想であり、夢のような大計画である。また地方についても、国立音楽院の増設やシャンソン・センターまでつくるといふ計画が進みつつある。

しかし一方、フランスの経済状態は、貿易赤字の増大、フランの国際競争力の下落、失業の増加など、これまでにない苦境に立たされているといわれる。

ミッテラン政権も、急きよ、当初の景氣刺激・拡大型の政策から引き締め・縮小型の財政政策へと転換をはかろうとしている。

このような厳しい時期に、フランス文化のルネッサンスを標榜した新文化政策について、財政的裏付けをはたして実際にどの程度確保しうるかが問題であろう。

一九八二年度、文化省予算の倍増により、フランス政府の中のシンデレラといわれたジャック・ラング文化政策も、その前途は、決して容易ではないと思われる。

文化の新しいルネッサンスと緊縮財政

ラング文化大臣は、一九八二年における文化省予算の倍増にあたり、八三年には、文化省予算を是非とも政府全体予算の一パーセントにまでもって行きたいと、繰り返し言明していた。

八三年の文化省予算は、この方針に沿って大幅に増額され、総額六九億九一〇〇万フランとなった。

だが、これは政府全体予算の〇・七九パーセントにとどまり、一パーセントにはまだ距離がある数字である。

しかし、一九八三年の政府予算全体の伸び率が一・九パーセントであったのに比べると、文化省予算は一六・六パーセントの伸びを示している。文化政策が重点施策として拡充がはかられたことは明らかである。

「フランスは、今や新たな文化のルネッサンスに着手し始めた……」

とミッテラン大統領・ラング文化大臣は高らかに宣言して、新しい文化政策を打ち出した。その数々の大胆で多彩な構想には、目を見張るものがある。

オルセー駅の改造による一九世紀美術館の建設の推進、ルーヴル美術館の大拡張改修計画、バステュー広場への民衆オペラ劇場の

図5 フランス文化省予算使途別内訳—1982年

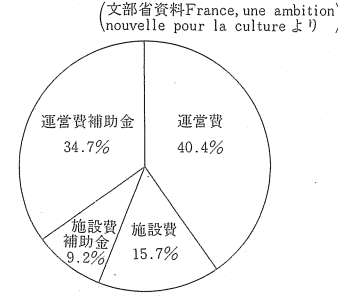
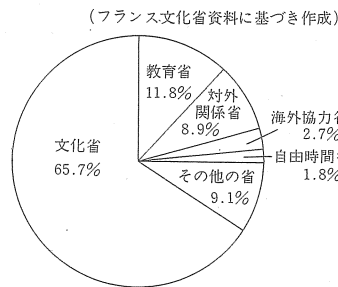


図6 文化関連総予算の概要—1982年



総計 91億2500万フラン

ジャック・ラング文化大臣のフランス国民議会における一九八二年予算説明。

France, une ambition nouvelle pour la culture — ministre la culture — La politique culturelle en France — unesco, 1981

■文楽公演（小劇場）

第一部

近江源氏先陣館

第二部

鎌倉三代記

五月七日～二十二日

●かいせつ

五月文楽は、大坂冬の陣、夏の陣を題材にした人形浄瑠璃の代表作「近江源氏先陣館」と「鎌倉三代記」を併せて上演する。「近江源氏先陣館」は近松半二、八民平七らの合作で明和六年（一七六九）竹本座初演、また「鎌倉三代記」も同じ近松半二らの作とされて、初演は天明元年（一七八一）江戸肥前座である。

第一部は、なんとといっても八段目の「盛綱陣屋」が有名で、敵味方にわかれ戦国の世を生きる武将佐々木盛綱、高綱兄弟の義を中心に親子の愛情を描いている。特に盛綱の首実検の場の小四郎の健気の最後は涙をさそう。今回朱が見つかって復活される「高綱隠れ家」は明治二十六年以来九十年ぶりの上演である。第二部では「三浦別れ」「高綱物語」が眼目、時姫の敵方三浦之助への恋心と親時政への恩愛との板ばさみによる苦悩と、七人の影武者を使つたという高綱の活躍を中心として変化に富んだ趣向は観客を飽きさせない。おらちが片肌脱いでお乳をブラブラさせて米のとき方を教えるところなどは滑稽

で人形ならではのもしろさをみせる。なお石山本陣も久々の復活である。

●あらすじ

「近江源氏先陣館」（坂本城）京方の佐々木高綱が坂本城を守っているところへ兄盛綱がたずねてきて、高綱を鎌倉方へひき入れようとする。初陣の高綱の子小四郎は、計略のためわざと盛綱の子小三郎に生捕られる。（和田兵衛上使・小四郎恩愛・盛綱首実検）京方から和田兵衛が使者となって小四



鎌倉三代記

郎を返してくれというが盛綱はことわり。盛綱は主人時政が小四郎をおとりに高綱を味方にしようとするの察し、母微妙に小四郎を殺すように頼む。高綱討死の知らせがあり、主人時政からその首実検を命ぜられた盛綱は、にせ首と知りながら父の首だといつて切腹した小四郎の健気に打たれ時政をあざむく。（高綱隠れ家）高綱

は船頭に姿をやつし、時政方をあざむいて坂本城に敵をおびきよせる。

「鎌倉三代記」（入墨）一旦和睦した京、鎌倉が再び合戦となる。時政は

高綱と似ている百姓藤三が紛らわしいと顔に入墨をさせ、三浦之助のもとへ走った時姫をとりかえす役を仰せつける。（局使者・米洗い・三浦別れ・高綱物語）三浦之助の母は病気を煩い、時姫は看護していた。大病と聞いて三浦之助は戦場からもどる。三浦之助が敵將の娘を妻に迎えることを拒むので時姫は父から渡された刀で死を計るが、その刀で父を討てば妻にするといわれこれを承知する。これを聞いた間者富田六郎を刺して井戸の抜穴から現われた藤三郎実は高綱は北條方を欺いた計略を語る。時姫の槍にかかった老母は三浦之助や時姫をばげまし、三浦は戦場へ時姫は父のもとへおもむく。（石山本陣）三浦之助の首が実検に供される。藤三郎の高綱は時姫に父を討つようすすめ時政を砲撃するが果たせず、時姫は父を刺すことはできず自害する。

■舞踊公演（大劇場）

道成寺の舞踊

五月二十七日～二十八日

■演芸（演芸場）

上席 五月一日～十日
中席 五月十一日～二十日
花形新人演芸会 五月二十一日
国立名人会 五月二十八日
演芸を楽しむ会 五月二十九日

編集後記

〇ぬばたまの夜霧は立ちぬ衣手の高麗の上になびくまでに

飛鳥・山田寺跡の発掘調査は、さる十二月のマス・コミで大きくとりあげられましたが、今月号は、この調査にあたられた奈良文化財研究所の細見室長にその概要の説明をお願いしました。

〇映画の斜陽化がいわれて、久しくなり「難波」に乗り切れるか日本映画界は映画人の映画を想う心情が伝わってくるようです。文化庁では、優秀映画製作奨励金交付制度を設け、映画の製作の振興を図っていますが、日本映画界の今後の発展に期待したいものです。

〇昭和五十八年度の予算も成立し、新年度が始まりました。本誌も、さらに文化の振興に役立ちたいと考えていますので、今年度もよろしく願います。（W）

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)二六八二二四一(代表)

「文化庁月報」四月号

昭和58年4月25日印刷・発行
編集 文化庁

千100東京市代田区関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい
本社 東京都中央区銀座5丁目4番12号
営業所 千100東京市代田区西新井52番地
電話(03)二六八二二四一(代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)